

キミの生きる セカイ



みゆーさん☆



一 雪と温泉と少女たち

その日は——吹雪いていた。

昼にしては暗く、夜にしては明るい曇り空の下、強風に煽られた雪たちは地面を白く染めていく。

「・・・・・・・・・・」

雪の上に倒れた男は指先一つ動かない。

生きているのか？

死んでいるのか？

しかし誰に発見されることもなく、徐々に雪の中へと埋没していく。

「つん。・・・つんつん。うが？ 生きてるかー？」

荒れ狂うように吹く風音とは異なる少女の声音が聞こえる。

(俺はまだ——生きてるのか？)

同時に、男は自らの命の灯が尽きていないことを知る。

「うが？ こんなところで寝て気持ち良いか？」

雪は吹雪いているのに、少女は気にとめる様子もなく無邪気に問いかける。

(た・・・たすけ・・・て、くれ)

ダメだ。

声が出ない。

無邪気な少女には、おそらく伝わらない。

そもそもこんなに吹雪いた雪原地帯に、少女が平然と立っていられるのだろうか？

「うーが？」

今聞こえた声も、おそらく幻聴だろう。

霞みがかった思考はさらに鈍くなっていく。

(今度こそ、・・・ダメだ)

やがて男の意識は深く閉ざされた。

『——えますか？ 私の声が』

「ん？」

『届きますか？ 私の言葉が』

「その声は確か・・・石塔の？」

「・・・急いでください」

か細い女の子の声が遠のいていく。

「待って！ 君は一体誰なんだ？ 何が言いたいんだ？」

「世界が闇に染まる、その前に。・・・早く——」

「まっ!？」

深い闇の世界。

まるで底無し沼のように吞まれていく。

「く・・・なんだ、これは？」

もがけばもがくほど、深みへとはまっていく。

「くそ！ この！・・・なんだ？ 暑い？ いや、熱いのか？」

体が焼けるような熱を帯びると、その感覚はすぐに全身へと広がる。

「くう・・・・・・・・・・！」

「——————あちい～！」

全身を赤く染めた男は飛び上がった。

「はあ、はあ、はあ。・・・ここは？」

周囲を見渡すと、雪化粧に負けないほど白い蒸気が立ち込めている。

「・・・温泉・・・か？」

考える間もなく理解してしまうその場所は、間違いなく温泉。

冷え切った体は体温を取り戻し、凍傷で動かなかった指先も今は感覚を取り戻している。

「俺・・・いつの間にこんなところに？」

記憶がない。

「エリアス目指してて、道に迷って・・・吹雪に遭って・・・それから・・・え
っと・・・・・・・・」

思い出そうにも思い出せず、ため息を一つ。

「——ん？」

なんとなく下げた目線の先に、白い物体が飛び込んできた。

それは丸くて、小さく左右に揺れている。

おそらくフードを被った、人間の頭だ。

「ぞうさんぞうさん。お鼻が長いの？」

「は？ ぞうさん？」

幼い少女の声が下の方から聞こえる。ずいぶんと背の小さい女の子だ。

——と、思っていると、違和感を感じた。それからすぐに、

「んなっ！ ※△☆×#Я=И▽！」

なぜか全裸であることに気づくと同時に、下半身を両手で押さえて湯船に沈む。

「あれー？ ぞうさんばいばい？」

白いフードを被った小さな女の子は少し寂しそうに首を小さく傾げた。

「ぶくばくばばぼばげばばぶっ！」

なんで裸なんだよ！ と口を湯につけたまま投げ捨てるように叫ぶ。

「セルキー！ ぞうさんが、ぞうさんがー」

小さな女の子はてくてくと小走りで出口へと駆けていく。

それから間もなく、今度は青いフードを被った少し背の高い女の子と一緒に戻ってきた。

「うが。目、覚めたか？」

「・・・・・・・・君は？」

アザラシ？ いや、セイウチか？

そんな色違いのフードを、二人の女の子は深く被っている。

「私はセルキー。こっちは妹のチョーキーだ」

白いフードを被った女の子、チョーキーはセルキーの後ろに隠れながらこちらの様子を恥ずかしそうに窺っている。

「俺はサクマ。助けてくれたのは君だろ？ ありがとう」

掠れた意識の中で聞いた少女の声。それはセルキーのものだとすぐに分かった。

「うが。雪のベットも良いけど、温泉も良いぞ。ほかほかぬくぬくだ」

セルキーが屈託のない表情で、にひ。と笑うと、サクマもつられるように笑みをこぼした。

「ところで俺はどうして裸なんだ？」

「衣服を着用しての入浴はマナー違反だ。そんなのじょーしきだろ？」

「・・・・・・・・ま、そうだな」

反論の余地もなく苦笑する。

「ぞうさん、ぞうさん。セルキー、ぞうさんいる」

「ぞうさん？ はははは。こんなところにいるわけないだろ。チョーキーは面白いことを言うなー」

チョーキーはその小さな指でサクマをさしながらセルキーに訴える。

「ぞうさんいるもん！」

「そうかそうか。それじゃあ今度ぜひ会ってみたいものだな」

無邪気な二人の姉妹を前に、サクマはのぼせるまで湯船から出ることができなかった。

「エリアスへはこのレプリゼ温泉から西の方へ歩いて行けばそのうち着くぞ」

「西か」

「うが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・西ねー」

「うが？ サクマは方向音痴なのか？」

サクマは見渡す。

方角すら分からない、分かるはずのない銀世界を。

「方向音痴とかいう問題じゃないだろ！ 北がどっちかすら分かんないぞこれ！」

「うがー？」

どうして？ といった表情のセルキー。

吹雪はやんで太陽が眩しいくらいに輝いてはいるものの、目印になる建物はおろか木や岩といった障害物すら見当たらない。

「まったく、しょうがないなー」

セルキーは両手を腰に当てて一息吐く。

「チョーキー。ちょっとこの方向音痴を送ってくるから、留守番を頼む」

「うん。チョーキー、留守番する」

「いい子だな」

セルキーがチョーキーの頭を撫でると、チョーキーは満面の笑みを浮かべた。

「それじゃあ行ってくるー」

「セルキー、早く帰ってきてねー」

チョーキーに手を振り、レプリゼ温泉をあとにする。

見上げた青空はしばらく崩れそうになかった。

積もったばかりの新雪に足跡を残しながらエリアスを目指す。

「サクマは冒険者なのか？」

「ああ。ジエンディア大陸に着たはいいものの、まさかいきなり遭難するとは思わなかった。セルキーが見つめてくれなかったら今頃あの世に旅立ってたよ」

「天候が不安定な今の時期はあまり人間が近づく場所じゃないからな」

「セルキーはチョーキーと二人であの温泉に住んでるのか？」

「うが。人間も滅多にこないし、とても静かでいいところだ」

晴れているとはいえ雪の積もった雪原地帯で、青いフードに胸と腰に布切れ一枚を巻き、素足なのか靴なのか分からない獣の足をしたセルキー。時折でてくる人間という単語が、まで自分は人間ではないと言っているような気にさせる。しかしフードの隙間から覗く繊細な金髪に透き通った群青の瞳は、とても綺麗な人間の女の子にしか見えない。

「ん？」

不意に、足が止まった。

「どうしたサクマ？」

「・・・何かいる」

三メートルほど先の地面が不自然に盛り上がっている。

明らかに、何者かが隠れている。

「ぷりーん！」

「っ！」

突然、雪の下から数匹のモンスターが飛び出してきた。

「ケモノプリリンか！」

サクマは腰に掛けてある二本の刀を抜く。

双刀。サクマはブレイダーだ。

「待って待って！ 攻撃しちゃだめ！」

構えた途端、セルキーが慌てて静止する。

「セルキー！ 危ないから下がってろ」

「違う、危なくない！ 彼らは私の友達だ。襲ってこない！」

「モンスターが友達？」

「悪いのは人間だ。人間がアイテム欲しさに襲ってくるんだ！」

「セルキー？」

サクマは気づいた。

必死に訴えかけるセルキーの目に、光るものが浮かんでいることに。

改めてケモノプリリンに目を向ける。

「ぷりりん？」

襲ってくる気配も、殺気すら感じない。

数匹いる中の何匹かは、サクマに怯えているようにも見える。

「・・・分かったよセルキー」

そう言いながら双刀を鞘に収める。

「お前たち。この人間は私たちに危害を加えたりしない。安心しろ」

「ぷり～ん？」

「ぷりぷり」

「ぷりりんぷりん」

何を話しているのかは理解できなかったが、ケモノプリリンたちは跳ねながらどこかへ姿を消していった。

「人間は、私たちのことをモンスターと言って恐れ、問答無用で攻撃してくる」

セルキーは下唇を噛むと、両手を強く握り締める。

「——サクマも、そうなのか？ 他の人間とやっぱり・・・同じなのか？」

悲哀に揺れる群青の瞳がサクマの胸に突き刺さる。

モンスターは敵。

倒すべき相手。

その概念に囚われているのはサクマも同じだった。

「セルキー。君は友達思いで、俺を助けてくれた優しい子だ。例えモンスターであれ、人間であれ.....、俺は君に刃を向けたりはしない」

「サクマー」

セルキーの目がぱあーと明るくなる。

「サクマは良い人間だな」

歩き出したセルキーの歩調は軽快に弾んでいた。

「この橋を渡った先にエリアス空港がある。街はそのすぐ隣だ」

「そっか。ありがとな、セルキー」

「うが。気にするな」

遠目ではあるが、目に映る空港や街並みにサクマは安堵の息を漏らす。

「そうだ。セルキーも一緒に行かないか？ いろいろお世話になったからお礼もしたいし」

「うが？うー」

セルキーは表情に影を落として目を細めると、そのまま視線を地面へと向ける。

「.....やめておくよ。私が街へ行くと、その.....いろいろ面倒な事になるんだ」

「めんどろ？」

「気持ちだけもらっておくさ。ありがとな、サクマ」

顔を上げて笑みを浮かべるセルキー。無理をしたようなその表情は、とても笑っているように見えなかった。

「そうだ。確か鞆の中に・・・」

「うが？」

サクマは持っていた鞆の中をごそごとと探りはじめた。

「お、あったあった」

「それはなんだ？」

「服だよ。男物だけど、これに着替えて変装すればエリアスに行ってもセルキーだってばれないだろ？」

サクマは服を取り出すと、それをセルキーに渡す。

「え？ でも、サクマ、私は・・・」

サクマはすっと、セルキーのフードをぬがした。

「あ」

絹のように繊細な金髪が陽光を浴びてキラキラと反射する。サクマを映す群青の瞳も、無邪気な子供が好奇心を示しているかのように輝いている。

(セルキーは本当に・・・モンスターなのか?)

そんな疑問を抱いてならないほど、そこには可愛らしい女の子が立っていた。

「さっきから行きたがるような目で街の方を見てるぞ？ 変装して、俺から離れなければ大丈夫。何かあったら、守ってやる」

「良いのか？ 私、街へ行って良いのか？」

サクマはセルキーの頭に、鞆から取り出した茶色の帽子を被せた。

「ああ。一緒に行こう」

二 旅はここから

エリアスにはサクマ以外の冒険者も多く集まり、活気盛んな賑わいを見せている。

「すごいなー。人間がいっぱいだ」

目を輝かせたセルキーは興奮が収まらない様子で、常にキョロキョロと周囲を見渡している。

「セルキーは街の中に入るのは初めてなのか？」

「うが。いつも遠目に見るだけだったからな」

「そっか」

「チョーキーも・・・連れてくれば良かった」

少し寂しそうに、小声でそう言った。

「お、あった。これだ」

「うが？」

足を止めたサクマの前には、石塔が建っている。

「俺はこの石塔を探してたんだ」

「イリスの石塔を？ それならエリアスだけじゃなくてあっちこっちにあるぞ？」

「え？ あれれ？」

「知らなかったのか？ サクマが遭難した雪原にもあるぞ？」

「・・・知らなかった」

サクマは肩をがっくりと落とした。それから一呼吸置いて、イリスの石塔に触れる。

(イリス。君は一体何者なんだ？ どうして俺に語りかける？)

そっと祈るように目を閉じると、まだ見ぬ少女、イリスの姿を思い浮かべる。

『世界が闇に染まる、その前に。・・・早く——』

その言葉の意味を考えながら。

「サクマはイリスのことが知りたいのか？」

「ん？ ああ。知りたいっていうのもあるけど、一度会って見たい。会えば彼女が何を伝えようとしているのか分かる気がするんだ」

イリスがどんな少女なのか分からない。

イリスが何を伝えようとしているのか分からない。

分からないことばかりだからこそ、会いたい気持ちが強くなっていく。

「私はイリスのことはよく知らないけど、トニオなら知ってるかもだ」

「トニオ？」

「うが。交易商の人間で、お金のためらなんでもするすごい人間だ。前に何度かレプリゼ温泉に来たことがあるんだ。秘湯の湯を売ってどうのこうの言ってたなー」

「交易商かー」

世界をまたにかけける商人なら、知識も豊富かもしれない。そんな期待が込み上げてくる。

「トニオはすごい有名人なんだ。道行く冒険者たちが金の亡者とか成金とか言ってるのを聞いたことがあるぞ」

「それ、褒めてないよね？ 信頼の欠片も感じられないんだけど」

「うがー？」

セルキーは人差し指を顎に当てると首を傾げた。

どうやら言葉の意味は知らないようだ。

「それにいくら有名人でも都合良く会えるとは限らないしな……」

「うが？ あそこにいるのトニオじゃないか？」

「え？」

「王宮の門の近くにいる、派手な服を着た黒い人だ」

セルキーに言われるまま目を向けると、そこにはカラフルな衣装に身を包み、大きな宝石がはめ込まれた指輪を何個もしている人物が、数人の冒険者と思われる人と話している。

「……成金、か」

サクマは苦笑した。

人を見かけで判断するのは良くないことだが、しかしそれでも、トニオのその風貌はセルキーの言葉を否定する要素を含んでいなかった。

「あの、すみません」

「んー？ ふーむ。見慣れない顔だね。冒険者かい？」

「ええ。サクマと言います」

「はっはっはっは。今日はよく声をかけられる日だ。君も何か珍しいアイテムでも求めているのかな？」

何か良いことでもあったのか、トニオは低い声で陽気に笑う。

「ちょっとイリスについて聞きたいんですけど、何かご存知ですか？」

「んー？ ……んーむ。イリス……ねえ」

イリスの名前を出した途端、トニオは目を細めてサクマの容姿を窺い始めた。

「あ、あの……何かありましたか？」

「ふーむ。いや、別にそうじゃないんだけどね」

歯切れの悪い口調に、サクマは気まずくなってしまう。

「うが。トニオ、卑しいこと考えてる。トニオ、お金のこと考えると変な顔になる」

「はっはっはっは。悪い悪い。情報も金になるんだ——んう？」

トニオは目を疑うように身を乗り出すと、サクマの隣に立つセルキーの顔を覗き込む。

「せ……セルキー？ セルキーか？」

「うが」

トニオは周囲を警戒すると、小声で話し出す。

「ダメじゃないかセルキー。街の中は危ないと、あれほど言ってるだろ？」

「へんそーしてるから大丈夫。サクマに服、もらったんだ」

帽子の位置を直すかのように両手で頭を押さえながら、嬉しそうに話す。

そんなセルキーの表情を前にしたトニオは困ったように眉間に皺を寄せると、睨むようにサクマを見る。

「君、サクマ・・・と言ったね。どういうつもりだ？ セルキーを街の中に連れて入るとは」

「何か問題でも？」

「大問題だ！」

トニオは唾を飛ばしながら声を上げた。

「おっと。・・・ごほん。失礼」

周囲を気かけると、声を小さくして続ける。

「いくら変装してるとはいえ、もしもセルキーの正体がばれたら街中がパニックになりかねない。人がモンスターと遭遇した時の反応など、冒険者なら分かるはず」

「いや、でも、セルキーは良い子だ。優しくて、友達思いの」

「そんなことは知ってるとも。しかしそれを知るのはこの街では私と君だけだ。他の人は知らないし、知ろうともしないだろう」

「そ、それは・・・」

サクマは横目で周囲を見て、道行く人々の姿を捉える。

「悪いことは言わん。セルキーを連れてすぐに街を出るんだ」

モンスターと遭遇した時の反応―――。

逃げるか、

戦うか。

「俺にはセルキーがモンスターだなんて思えない。遭難した俺を助けてくれたし、このエリアまで案内までしてくれた」

出会ってからまだ一日も経っていない。しかしそれでも、セルキーが人間を襲うような凶暴なモンスターとは違うと、サクマは断言する。

ふうー。と、トニオは肩を落とした。

「サクマ。君は世界を知らなさすぎる。モンスターの中には人間の言葉を理解し、人間の言葉を話し、そして中には人間のように振舞う、進化したモンスターというものがある」

「セルキーがその、進化したモンスターっていうのか？」

「私も全てを知っているわけではないので断言はできない。しかし、少なくとも、モンスターと共に過ごしていることに変わりはない」

サクマはセルキーを見る。

目が合うと、「うが？」と首を傾げるセルキーの頭を、片手でそっと撫でた。

「ふーむ。話がそれてしまったようだ。イリスの・・・ことだったね？」

「あ、はい」

「イリスの何について聞きたいのかな？」

「イリスは今、どこにいるんですか？ どこに行けば会えますか？」

「これはこれは、またなんとも」

トニオは表情を崩すと、苦笑した。

それから街の喧騒が気になるほど、難しい表情のまま沈黙を保つ。

それからしばらくして、「すまない」と、首を横に振った。

「イリスの居場所は私にも分からない。力になれそうにない」

「そうですか・・・」

交易商であるトニオが知らないとなれば、イリスに会うことが困難に思えてくる。

「うが。話、終わったのか？」

二人が黙っているのを疑問に思ったセルキーが口を開く。

「トニオ、また温泉くみにくる？」

「ふーむ。レプリゼの湯は希少だからね。また行かせてもらうよ」

「うが。チョーキーにも言うておく」

「ああ。頼むよ」

目を大きく広げて輝かせるセルキーは、とても嬉しそうだ。

それこそ人間の子供のように。

「それじゃあ俺らはこのへんで」

「あー、ちょっと待ちたまえ」

「？」

踵を返し、立ち去ろうとしたところを呼び止められた。

「ここから龍京に向かい、さらに先に進むと桜木の湖がある。そのすぐ近くにアオイチという街があって、そこの黒月城という場所に住まう姫・・・黒月姫に聞けば何か分かるかもしれん。彼女はその昔、イリスと共に旅をしていたからね」

「ほ、本当ですか？」

「話が聞ければ・・・だがね」

「ありがとうございます！」

「ふーむ。あまり長居はするものじゃない。早くセルキーを連れて街を出なさい」

「はい。それじゃあ」

「ばいばい、トニオ」

「俺は今からアオイチを目指す。いろいろ世話になったな、ありがとう」

エリアスを出ると、サクマは言った。

「うが？ サクマ、一人で大丈夫か？ また遭難しないか？」

「・・・多分、大丈夫」

胸をナイフで刺されたような鋭い痛みを感じた。

「サクマ。私も一緒に行って良いか？」

「え？ 一緒に？」

「うが。もっともっと、いろんなものを見てみたい」

恍惚とした表情は、未だ見ぬ世界に対する憧れや好奇心の表れ。その純粋すぎる思いに、サクマも迷ってしまう。

「チョーキーを一人にしているのか？ 寂しがるぞ」

「大丈夫。さっき、ポストマンに手紙を頼んできた」

いつの間に——。と、苦笑する。

セルキーと一緒に来てくれるのは心強い。何より遭難したり行き倒れたりする可能性がぐっと低くなる。しかし、それよりもサクマには気になることが一つ、ある。

「セルキー、一つ確認しておきたいことがある」

「うが？」

「途中、モンスターが襲ってくれば戦うことだってある。セルキーはずっと槍をもっているけど、モンスターとは戦えるのかい？」

セルキーは少し、ほんの少しだけ視線をそらす。

「悲しいことだけどそれは仕方ないことだ。モンスターの中には悪いやつもいるからな。自分の身を守るためには戦うことも必要なんだ」

その悲しい表情の前に、サクマは心を打たれずにはいられなかった。

「——分かった。それじゃセルキー、改めてよろしくな」

「うが！」

交わした手から伝わる温もり。

そこからはモンスターにはない、確かな『心』を感じ取った。

エリアスをあとにしたサクマとセルキーはアオイチを目指す。

緑広がる穏やかな野原を歩き山岳地帯を越えると龍京に入る。その龍京で足休めに食事をとって、再びアオイチへと向う。

ここにいたるまでの間、何度かモンスターとの戦闘もあった。サクマの予想に反してセルキーは一戦い慣れしていて頼もしいパーティーでもあった。

ただ、セルキーが今まで戦ってきた中に人間との戦闘が何度あったのか——。気にはなったものの、口に出して聞くことはしなかった。

赤いさとうきび畑。

ほんの少し前を楽しそうに歩くセルキーは、変装と称して渡したサクマの服が気に入ったのか、エリアスからずっと着ていた。

「サクマ、大変だ！」

不意に、驚愕の音が響く。

「どうした？」

「か、か、かぼちゃが浮いてるぞ！」

「？」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。

「はははは。かぼちゃが浮くわけないだろ？　そもそもかぼちゃは美味しく——」

目が合った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふちの広い黒い帽子を被ったかぼちゃが、ランタンで周囲を灯しながら赤い目でこちらを見ている。さらに、

「私はおいしい野菜、かぼちゃでございます！」

話しかけてきた。

「サクマ。かぼちゃ食べたい！」

「天ぷらにしますか？　それともスープにしますか？　どちらにしても美味しいでございます」

「そんなこと聞いてねーよ！」

思わずツッコミを入れてしまった。

「サクマ、こいつモンスターだ！」

人間の言葉を理解し、話す、進化したモンスター。双刀を構えたサクマの脳裏にトニオの言葉が蘇る。

「ちょっと待つでございます」

「うがー？」

構えたサクマとセルキーの動きが止まった。

「私は戦闘を好みません。ただ、私のお願いを聞いてくれれば危害は加えません」

「お願い？」

「はい。あるものを一つ、いただければそれで十分でございます」

「うが。あるものってなんだ？」

「はい。それは、下着でございます」

「は？ あ、いや、下着って・・・パンツとか？」

「はい。下着をいただければこの先、私の仲間たちもあなた様に危害を加えたりはしません」

「なんだお前、パンツが欲しいのか。仕方ないなー」

そう言いながらセルキーは下着に手をかける。

「ちょっと待つでございます」

「うが？」

「私が所望するのはあなたではなく、そちらの・・・殿方の下着でございます」

再び、目が合った。

同時に、背中にぞっと悪寒が走った。

「セルキー・・・」

「うが？」

「逃げるぞ！」

「うがー！」

サクマはセルキーの腕を取ると、猛然と走り出す。

「待つでございます！ 下着を置いて行くでございます！」

逃がしまいと、あとを追ってくるかぼちゃのモンスター・・・キングパンプキン。まるで幽霊のように空中をふわふわと浮いている。

「進化したモンスターって、進化する方向間違ってるんだろこれは！」

「うがー」

血相を変えて必死に走るサクマ。その後ろで、セルキーはなぜか楽しそうにしていた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

どれだけ走って逃げてきただろうか。

気がつけば、辺りには満開の桜が咲き乱れていた。

「うがー。綺麗だな。なんだこれ？ 桃色の花が雪のように舞ってるぞ」

セルキーは両手を広げると、まるで踊るようにその場でくるりと回ってみせる。

初めて見たのだろう。欣喜雀躍するその姿にサクマも自然と笑みをこぼす。

「この花は桜って言うんだ」

「さくら・・・桜かあ。綺麗だな。チョーキーにも見せてあげたいよ」

「それじゃ今度、三人でこようか。きっとチョーキーも喜ぶぞ」

「うが！ そうだな。約束だぞ、サクマ」

桜の花が舞っていた。

誰に強要されることもなく、緩やかな風に誘われるように、ひらひらと。

柔和に笑うセルキーの姿を見ながら、サクマは胸を撫で下ろす。

人間か、モンスターか。

そんな疑問さえどうでもよくなってしまふような気持ちに包まれていた。

だが、しかし、世界はそれほど優しくなかった。

シュン！ と、鋭利な刃物が風を切るような音がした。

「！？」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

サクマの視界には、胸元から赤い血しぶきを舞い上げながら倒れていくセルキーの姿がスロームーションのように映っていた。

「せ・・・セルキー！」

慌ててセルキーのもとへ駆ける。

たった三歩程度の、手に届くはずの、守れたはずの距離を。

「セルキー！ おい、しっかりしろ！」

返事はない。

気を失っているようだ。

「くっ！」

手に溢れる温もりが風にさらわれていくように、徐々に抜けていく。

早く手当てをしなければ命が危ない。

「まったく。すぐ近くにモンスターがいて棒立ちとは・・・。お主は何を考えておる？」

気品のある澄んだ声音の方に目を向けると、そこには片手に弓を構えた女性が立っていた。腰の辺りまである黒髪はクセがあり、陽光に照らされて艶やかになびいている。

「・・・あんたは？」

「私は黒月。みなは黒月姫と呼ぶ」

(！ この人がトニオの言った・・・)

「こうもモンスターに近づかれてはおちおちと花見もできんの。せっかくの宴も興ざめじゃ」

「！？」

「お主は冒険者か？ 呆然と立っておると命を落とすぞ。用心せい」

「う・・・まえか？」

「ん？ なんじゃ？ 礼なら別によい。気にするな」

「撃ったのはお前か！」

激昂するサクマの声が荒々しく揺れる。

「？ それがどうした？」

「なぜ撃った！ どうしてセルキーを撃ったんだ！」

黒月姫は見下すような目線で地面に倒れたセルキーを視界に入れる。それから鼻を鳴らして、「モンスターを撃つのに理由があるのか？」と淡白に答えた。

「セルキーのどこがモンスターなんだよ！」

サクマの服を着て、見かけではモンスターとは断言できるはずがなかった。

しかし黒月姫は「ふん」と鼻を微かに動かしてから「獣などいくら変装したところでその臭いを消すことなどできん」

と、切り捨てた。

「セルキーは無害だ！ 撃つ理由なんてない！」

「・・・・・・・・・・」

黒月姫の視線が鋭く変化すると、怪訝な面持ちでサクマを睨む。

「謝れ！ セルキーにあやまれよ！」

「死にぞこないに語る言葉などない。ましてや相手はモンスター。・・・なおさらじゃ」

ビリ、ビリビリ。と、サクマは自分の服を破ってその切れ端でセルキーの傷口を塞ぐ。しかしすぐに真っ赤に染まった布切れでは止血の役割は果たしそうにない。

「黒月姫。俺はあなたに聞きたいことがあってここまで来た」

「ほう。なんじゃ？ もうしてみろ」

「だけど、もう・・・それはいい」

「変なヤツじゃな。せっかくここまで来ておいて」

気を失ったセルキーの頭を軽く撫でたサクマは、鞘から双刀を抜くと黒月姫に向ける。

「セルキーに謝れ。彼女は・・・俺の大切な友達だ！」

一陣の風が吹き抜けると桜の花びらが勢いよく舞い上がる。

まるで戦（いくさ）の狼煙のように。

「・・・。おもしろいヤツじゃ。モンスターを友達と言うか？ ならばお主に教えてやろう」

黒月姫も対抗するかのように弓を構える。

「友など捨てる！ そう遠くない将来、必ず裏切られるぞ！」

吐き台詞のように言い捨てると同時に、黒月姫の手から弓矢が放たれた。

「友達は裏切らない！ 少なくとも俺は・・・絶対に！」

黒月姫に向って走り出したサクマは向ってくる矢を薙ぎ払った勢いのまま跳躍。そのまま黒月姫へと斬りかかる。

黒月姫は身軽な体でひらりとかわすと、再び矢を引く。

「人は人を裏切る。ましてはお主の相手はモンスター。殺されてからでは遅いぞ！」

黒月姫は弓矢をサクマには向けず、真上、上空に向けて放った。

「ジェノサイドレイン！」

無数の矢がサクマの頭上から降り注ぐ。

「ぐう！」

反応が間に合わず、サクマは黒月姫の攻撃を全身に受けてしまった。

「手加減はしておる。悪いことは言わん。大人しくそこのモンスターを見捨てるんじゃ」

モンスターは倒すべき敵。

それは、冒険者であるサクマも知っている。

「黒月姫。あんた・・・誰に裏切られたんだ？」

「っ！？」

途端、黒月姫の顔色が変わった。

「お主には関係のないことじゃ。余計なことを喋るなら殺すぞ？」

サクマは眼光を鋭くして黒月姫を視界に入れる。

「・・・イリスにでも愛想つかされたのか？」

「っ！ き、きさまあ！」

激変。

黒月姫の表情が一転する。

「もうよい。そこの死にぞこないと一緒にあの世に送ってくれようぞ！」

黒月姫は弓を強く引くと力を込める。明らかな殺意を剥き出しにして。

が、しかし—————

「なっ・・・」

金属がぶつかる高い音が響いたのも束の間、弓を弾かれた黒月姫の喉元に刃が突きつけられていた。

(今のは・・・)

一瞬にして詰められた距離に黒月姫の顔色が変わる。

「謝れよ。セルキーに」

息の上がったサクマを黒月姫は鋭い眼光で睨む。

「・・・お主は、不思議な人間じゃな」

「え？」

「ふんっ！」

「がはあ！」

黒月姫の拳打が腹部にめり込むと、サクマは崩れるように膝をついた。

「私に聞きたいことがあると言っておったな？ 私はアオイチの黒月城におる。いつでもこい」

踵を返した黒月姫は弾かれた弓を拾う。それからサクマの方を振り返ることなく去っていく。

「ま・・・てよ、こ・・・の・・・」

腹部に力が入らず、思うように声が出せない。それどころか徐々に視界が閉じていく。

「・・・すまなかったな。セルキーとやら」

朦朧とした意識の中で黒月姫の声が聞こえた。

それが幻聴なのかどうかさえ分からないまま、サクマの意識は暗闇の中に沈んでいった。

四 桜木の約束

静寂した暗闇の中でかすかな物音が聞こえた。

「……………ん？」

ゆっくりと視界を開けると、光が差し込んでくる。

見慣れない天井が、そこにはあった。

「あ、気がつきましたか？」

「う……………こ、ここは？」

「ここはアオイチです。私は道具屋のユキナと、申します」

ベットの上で横になるサクマを看病するかのようだった女性は、清楚な白い着物に身を包み、物静かな物腰をしている。

どうやらここはユキナの家ようだ。

「俺は……………どうしてここに？」

黒月姫にやられたあとの記憶がない。思い出そうとすると頭に激痛が走る。

「まだ動かない方がよろしいですよ」

起き上がろうとしたサクマはユキナに止められる。

「覚えていらっしゃるのですか？ あなた様は血まみれの女の子を抱えて私の家の前で倒れていらっしゃるのです」

血まみれの——女の子？

一瞬、思考が止まった。

それからすぐに勢いよく起き上がると、血相を変えて周囲を見渡す。

「セルキーは？ セルキーはどこだ？」

「女の子のことですか？ 彼女なら少し前に出て行きましたけど。これをあなた様にと」

すっと差し出されたのは、二つ折りにされた一枚の紙。

ユキナからその紙を受け取る際に、サクマの横目に奇妙な物が入った。

(これは、俺がセルキーにあげた服？)

ベットの脇に置かれた服は、綺麗にたたまれている。

胸が締めつけられるような感覚の中、急いで受け取った紙を開いて見た。

「あの、ばかやろう！」

そして、握り潰す。

ぐっ！ と、やり場のない怒りと共に。

「ごめん！」

「あ……………」

ユキナが静止する間もなく、サクマは飛び出した。

桜の花が舞う湖。

そこでサクマの前をゆっくりとした歩調で歩いている、片手に槍を携えた青いフードを被った人物の姿が目にとまった。

「セルキーっ！」

その大きな声ははっきりと届いた。

そして、セルキーの足が止まる。

しかしセルキーは振り返らなかった。

「周りの人間がお前をモンスターだからって敵視しても、俺は絶対にそんなことしない、思わないからな！ だってそうだろ！ 俺たち————」

大声を出すだけで全身に激痛が走る。

しかしサクマは額に汗を滲ませながらも続けた。

「俺たち、友達なんだから！」

と、両手を強く握り締めて。

セルキーは振り返らない。

何も答えない。

やがてセルキーは再び歩き出す。槍を持つその手を、小刻みに震わせながら。

「セルキー！ いつか・・・絶対に迎えに行くから！ もっと強くなって、お前を守れるくらい強くなったら・・・その時は、三人でこの桜を見にこよう」

風が吹く。

二人の決別を悲しむかのように、そっと涙を拭うような感覚で。

今すぐ追いかけてセルキーの腕を掴みたい。だけど今のサクマには、それができるだけの強さがない。

セルキーの無邪気な笑顔が今になって痛く感じてしまう。

黒月姫の攻撃で受けた傷よりも、体の奥深く、芯へと響く痛みに胸を痛めながら。

————あれからずいぶんと時間（とき）が経ってしまった。

そんなことを思いながら雪原に足跡を残す冒険者。

爽快な青空から降り注ぐ陽光に白い雪が反射して眩しく輝く。つい目を細めてしまう景色の先に、ぽつりとした小屋が見えてきた。

「ん？ あれれ？ あー！」

冒険者の顔を見るなり、白いフードを被った小さな女の子が小屋の奥へと走って行く。

外観から見ても分かるが、小屋の奥からは絶え間なく白い湯気が立ち昇っている。どうやらここは温泉のようだ。

「セルキー！ セルキー、ぞうさんがきたー！」

小屋の奥から響く幼い声に、冒険者は懐かしむように苦笑する。

「こっち、早く！」

「チョーキー、こんなところにぞうさんはこないと、何度も言ってるだろう」

「いるもん！ ぞうさんきたもん！」

「うが。そんなはずは————」

小屋の奥から、小さな女の子に手を引っ張られながら出てきた青いフードを被った女の子。フードの隙間から見え隠れする金髪と群青の瞳が懐かしく視界に滲む。

「よっ。久しぶり」

少し成長した、青いフードを被った女の子に冒険者は笑みを投げかける。

「さ・・・さく・・・」

女の子は瞳を潤ませながら何かを言おうとするが、呑み込んだ。

「な、何しに来た？ また遭難したのか？」

頬を紅潮させながら視線をそらす。どこか強気な口調が可愛く感じてしまうのは気のせいだろうか？

冒険者は一歩、前に出る。

それから少したくましさを感じさせる顔を柔和に微笑ませてから、言った。

「友達に会いに来たんだ。————久しぶり、セルキー。約束を、果たしに来たよ」